

日蓮聖人における五義成立時期の一考察

——『南条兵衛七郎殿御書』の五義の説示を視点として——

深 谷 恵 子

一 はじめに

(1) 問題の所在

日蓮聖人の教学を明らかにしようとする場合、その教判として『法華經』を最上とする立場を明確にし、『法華經』弘通者の軌範として、教・機・時・国・序の五義の問題を挙げることができる。その五義とは、一切經を釈尊一代の説法とし、『涅槃經』の「依法不依人」の文を依りどころとすることによって、『法華經』を最上とする立場から、日蓮聖人が立てた末法救済論である。^①五義の第一に挙げる「教」とは一切衆生の本師である釈尊の教えすなわち『法華經』を意味する。^②次に「機」とは、仏法を受容する能力、あるいは宗教的罪を犯している者を示す。聖人は私達衆生を、仏法を受容する能力がなく、貪瞋痴の三毒がきわめてあつ

く宗教的罪を日々に犯している存在で、謗法の者であるとされている。^③「時」とは、仏教の正法千年・像法千年・末法一万年の三時説を採用して、私達の生きる時代を末法と規定している。^④この時代は仏法も乱れた世で、仏教によってかえって惡道に墮ちる者も多いとされている。^⑤さらに、「国」とは、国や環境によって人の心は変わるものであるが、日本国は法華經有縁の国であるとしている。^⑥最後に「序」とは、さきに弘まる仏法の様を知って教えを弘めなければならないということである。聖人は、日本国は先に天台真言の二宗が弘められて機根が調えられており、法華經によって救われる機根であるとしている。^⑦

このような日蓮聖人の五義を受けて、現在の日蓮宗の宗義はどのように定義しているだろうか。

現在の「日蓮宗宗義大綱」の第一宗義の体系には、

日蓮宗は、日蓮聖人が信解体得せられた法華経を、本宗における理・教・行・証を基本とし、これによつて五綱と三秘を構成し、もつて宗義の体系とする。⁽⁸⁾

と記されており、五義は日蓮宗の宗義にとつて不可欠であると位置づけられている。なぜなら、五義と三秘によつて聖人の法華経的世界が末法救済として明確になるからである。

第二、五綱の意義には、

五綱は、日蓮聖人が法華経を信解体得せられるに当り、考察の基盤とされた教・機・時・国・師(序)の五箇の教判であつて、教と理とを明らかにする。更にそれは、宗教活動における自覚と弘教の方軌を示すものである。

教は、一念三千を包む法華経寿命品の肝心、南無妙法蓮華経をいい、五重相對・四種三段等の教判によつて詮顯されたものである。

機は、教が与えられる対象で、末法の凡夫をいい、等しく下種の大益を享受する。

時は、教と必然的に相應する末法今時の意味である。

国は、教の流布する場であり、日本を始めとする全世界が国である。

師は、教・機・時・国の意義と次第とを知り、これを自覚し、実践する仏教者である。⁽⁹⁾

と定義している。

五義を研究することは、日蓮聖人の末法救済の論理を究明するという意義がある。そこで本稿では、五義成立時期の問題を考察する。

(2) 五義成立に関する先行研究

日蓮聖人の五義成立に関する研究は、どのようなものがあるだろうか。

一九四五(昭和二十)年から二〇一四(平成二十六)年に発表された五義に関する研究は、管見のかぎり次にあげるAからDの四編確認できる。

A 茂田井教亨著『観心本尊抄研究序説』(一九六四年、山喜房佛書林) 第二部第一章収録

B 浅井圓道稿「五義判の形成過程の考察——五義の発表まで——」(一九六四年、『大崎学報』第一一八号)

C 浅井圓道稿「日蓮聖人の五義判の成立について

——選択集との関連において——（一九六五年、
『印度学仏教学研究』第十三卷第一号）

D 上田本昌稿「日蓮聖人における五義判の成立と展開」（一九八四年、『印度学仏教学研究』第三十三卷第一号）

では先師は五義成立はいつ頃とされているのだろうか。先に挙げた四編の先行研究を概観する。

A 茂田井教亨氏は、日蓮聖人の生涯を貫く思想を次のように述べている。

わたくしは聖人の幼少時からの発願と求道の態度からみて、いわゆる立教開宗の際の強い信仰的自己意識は、¹⁰「知教者」としての自覚であったと思う。そしてこの自覚は生涯渝らなかつたところと思うのである。

このような立場から、日蓮聖人の五義の自覚について次のように示されている。

「弘法用心」としての「五義」は、単に客観的教相の範疇に入るものではなく、「教」と「師」とが特定の「時」において相互に規定し合うとき有機的統合を有つものなのである。五箇の項がそれぞれ「知」によって統一されているのはそれであっ

て、いわゆる教相判釈なるものとは質を異にするのである。けだし教法に対する信仰的解釈は、体験の裏付けによって一つの客観性が与えられ、その体験は自覚と反省とをとおしてさらに人格的認識知に統一される。そこにこの「五義」の自覚は生れるのである。恐らく聖人としては建長五（一二五三）年の春、信仰を告白する当初にこの自覚は抱懷されたであろうが、整足的に相次いで発表されたのが伊豆流罪という第一の値難を契機としたのはそのためであろう。五項が「知」なる自覚知に統一される主体性は、値難によるエリート意識の決定を俟たねばならなかつたのである。¹¹

つまり、茂田井教亨氏は、聖人にとって「教」とは、教相判釈的な意義のみならず、経文の色読を通して知るという信仰的な面を有している。このような立場から、五義の自覚が生まれるという。この五義の自覚は、立教開宗の時に抱懷されたであろうが、伊豆流罪という値難の後に発表されたのは、このためであろう、と述べている。

次にBの浅井圓道氏の研究は、A茂田井教亨氏の研究を受けて、五義の整足に至るまで（つまり『教機時

『国鈔』(まで)を研究した論文である。⁽¹²⁾念仏宗の破邪と法華経の顕正という視点で日蓮聖人初期の遺文を検討し、聖人は一貫して念仏宗を破し、法華信仰の正しさが主張されていることを論証している。⁽¹³⁾聖人が『選本願念仏集』の時機判を破斥し、法華経を顕正することが五義判成立要因の一つであると推察されている。⁽¹⁴⁾次に『戒体即身成仏義』・『蓮盛鈔』・『守護国家論』・『唱法華題目鈔』・『立正安国論』に五義の説示が散見されることの確認をして『教機時国鈔』前に五義の各綱の概念がある程度成立し、この鈔において明確にされたと推察している。⁽¹⁵⁾

浅井圓道氏はCにおいて、

弘長二年以前に五義の各綱目は個別的にはあるが、仏法選択上に必要な立場の一として着眼されていた。特に正嘉元年(宗祖三十六歳)以降の御書に該当文が多数発見された。これは立正安国論作成のための三カ年の勉学期(いわゆる岩本実相寺入蔵時代)に五義判は次第に形成されつつあったという事実を示すものである。つまり、すでに着眼されていた個別的な概念を、流刑地にあつて与えられた九ヶ月の閑静な時間を利用して再検討

し、組織したのが五義判である。⁽¹⁶⁾と述べている。

最後に、Dの上田本昌氏は、茂田井教亨氏の研究を受け『撰時抄』の五義を検討し、五義の成立と展開の過程を考察されている。五義成立について、

聖人の五義は、佐前の伊豆において形成され、法華経の実践を通しつつ、次第に展開されて行つたが、佐渡流罪を経て、身延入山に至るに及んで、いよいよ大きく展開され、ついに『撰時抄』に於て、「時」について述べるといふ形をとりながらも五義の究極を示し、明確なものとなつていったとみなしうるのである。⁽¹⁷⁾

とされている。

先に挙げたAからDの先行研究のうち、茂田井教亨氏は聖人の生涯にわたる行動と思想を具に検討されており日蓮聖人教学研究史上、新たな五義の研究が樹立されたといえる。そこで私は茂田井教亨氏の研究に示唆を受け、五義成立の時期について考察をする。

なお、「五義」は「五綱」とも称されるが、聖人の遺文には「五義」と記されているので、本稿では「五義」として表記する。また、参照する遺文は、真蹟完存・

真蹟曾存・直弟写本とする。そのうち『唱法華題目鈔』は、日興上人の写本『南条兵衛七郎殿御書』の行間に書き入れされているが、本稿では考察の対象から除くことにする。これ以後『南条兵衛七郎殿御書』を『南条書』とする。

二 南条兵衛七郎教化を視点とした五義成立時期の検討

日蓮聖人遺文において、五義の綱目が詳説されているのは、文永元（一二六四）年十二月十三日、聖人四十三歳の時に駿河国富士郡上方上野郷在住の南条兵衛七郎に宛てた書状『南条書』である。この書の冒頭部には、南条兵衛七郎の病にふれて、後世を思い定めることをすすめ、そのためには釈尊の説いた教えを本とすべきことを強調されている。その次下には、教・機・時・国・序の五義を詳説されている。聖人自らこの書状をしたためられという事実から、これ以前から南条氏との交流があったことが窺えるのである。

それでは、日蓮聖人は南条兵衛七郎といつ頃出会い、法華経信仰へ導いたのだろうか。

茂田井教亨氏の研究によると、

五義を文字としてお書きになったのは『教機時国鈔』、『顕謗法抄』である。しかし、これを信徒の前で御述べになつていたことは明らかである。『南条兵衛七郎殿御書』の中に「との（殿）は、このぎをきこしめして云云」（『昭和定本』三二五頁）とある。五義の事をお説きになった後、殿は此の事を前から聞いていらつしやつた、と書いておられる。南条兵衛七郎個人に話された、とも受けとれるが、南条兵衛七郎は鎌倉の御家人で、領地の上野から鎌倉へ出仕して帰るので、出仕した時は恐らくいつも宗祖の草庵を敲いては法門を聞いていたのである。そして、従来念仏の信仰を捨て、聖人の法華経の教に帰依したのである。聖人の口から説かれる法門を、南条氏は耳で聞き、法華経の信仰をしたと思われる。従つて、伊豆流罪以前に既に説いておられたと思われる。しかし、文字にして表されたのは伊豆の流罪をを契機としたのである。¹⁸⁾

と聖人は口頭で法門を説いていたとされている。

北川前肇著『書簡にみる日蓮心の交流』によると、文永十一（一二七四）年七月二十六日付の『上野殿御

返事』に、日蓮聖人と南条兵衛七郎との出会いの一端が示されている記述が示されている。北川前肇氏のご教示によると、

『上野殿御返事』は、今は亡き南条兵衛七郎の子時光が聖人へ供養の品を届けたことに對する、時光の母宛の手紙である。この手紙によると、南条兵衛七郎氏没後、日蓮聖人と南条家との師と檀越の關係がこの頃に再開されたようである。聖人が南条兵衛七郎殿との出会いを回想された文に「かまくらにてかりそめの御事」⁽¹⁹⁾と記されている。「父上との鎌倉での出会いは、わずかな期間でありましたので、その場かぎりのことではと思っておりますが」と解釈されており、南条兵衛七郎殿とのつきあいはそれほど深くはなかったであろう。と推測されている。

つまり南条兵衛七郎は日蓮聖人の伊豆流罪前後に「鎌倉番役で上番した折り」⁽²⁰⁾に談義等で五義を聞いて念仏信仰から法華信仰に移ったであろうと推察している。

では、日蓮聖人遺文に、談義に関する記述はいつごろの遺文に見られるのだろうか。北川前肇氏のご教示によると、

談義に関する記述が聖人の遺文中、最初に登場するのが建長五（一二五三）年十二月九日に鎌倉にて富木氏宛にしたためられた『富木殿御返事』である。この消息には「ひるはみぐるしう候へば、よるまいり候はんと存候。ゆうさりとりのときばかりに給べく候。又御はた（渡）り候て法門をも御だんぎあるべく候。」⁽²¹⁾と記されている。日蓮聖人初期の頃は、一人または数人単位で法華經を講説していたようである。鎌倉において、昼間に公然と法華經を講説することには、さしさわりがあったことが窺える。

と述べている。このことから、日蓮聖人は早い時期から鎌倉で談義をしていたことが分かる。⁽²²⁾

以上、先師の研究に導かれ次の二点が確認できた。

一点めは、日蓮聖人は建長五（一二五三）年四月二十八日の立教開宗以後清澄寺を下山して鎌倉で談義の折に口頭で五義を説いて法華經信仰への教導していたこと。二点目は、談義は建長五（一二五三）年十二月九日書かれた書簡の『富木殿御返事』に見え、その頃行われていたことである。このことから、かなり早い時期から五義が口頭で説かれていたことが推察されるの

である。

三 『南条兵衛七郎殿御書』の五義の説示を視点とした『守護国家論』の検討

『南条書』に説かれている五義の説示は、いつ頃の遺文にみえるのだろうか。

『南条書』が著される前の遺文は、『守護国家論』・『災難興起由来』・『災難対治鈔』・『立正安国論』・『顕謗法鈔』がある。『災難興起由来』・『災難対治鈔』は、災難が興る由来について考察されている。また、『立正安国論』は、鎌倉幕府に上奏した書である。したがって、この三書は教義を検討する対象からは除くことにする。本稿では、病床の南条兵衛七郎に宛てた『南条書』（文永元（一二六四）年十二月十三日執筆）に五義が詳説されているのでこの書の五義の説示を視点として、伊豆流罪前を検討する著書として聖人初期の教学が示されている『守護国家論』（正元元（一二五九）年執筆）と伊豆流罪中に執筆された『顕謗法鈔』（弘長二（一二六二）年執筆）の検討を行うこととする。

建長五（一二五三）年四月二十八日立教開宗から弘長元（一二六一）年五月十二日伊豆流罪前までの著書

のうち、日蓮聖人初期における代表的な著書は『守護国家論』である。この書に五義の説示はみえるだろうか。『南条書』の五義の説示を視点として『守護国家論』における五義の説示を検討する。

次に掲載する表は、『南条書』の五義の説示を視点として『守護国家論』の五義の説示を一覧にしたものである。表の上段に『南条書』の五義の説示を配した。五義の説示の上には(a)から(n)のアルファベットを付し、その下に引用文を配し、さらに末尾のカッコ内に昭和定本の頁を付した。下段に、上段の五義の説示に類似した内容の『守護国家論』の引用文を配した。その文の上には丸数字を付し、さらに末尾のカッコ内に昭和定本の頁を付した。

(1) 「教」の説示

『南条兵衛七郎殿御書』の五義の説示	『守護国家論』の引用文
<p>(a) 一切衆生の本師にてまします釈尊の教こそ本にはなり候べけれ。(『昭和定本』三一九頁)</p> <p>(b) 而ども仏いかながおぼしけん、無量義經に以^テ方便力^ヲ四十余年^ニ未^レ顯^キ眞実^ニととかれて、先四十余年の往生極樂等の一切經は親の先判のごとくくひかえされて、過^ク無量無邊不可思議阿僧祇劫^ヲ終^ニ不^レ得^ル成^{スル}無上菩提^ヲといゐきらせ給て、法華經の方便品に重て正直捨^ニ方便^ヲ但説^ク無上道^ヲととかせ給り。方便をすてよととかれてはんべるは、四十余年の念仏等をすてよととかれて候。(『昭和定本』三一九—二〇頁)</p>	<p>① 法華經^ハ如來出世^{ナル}本懷^ニ故説^ク今者已満足 今正是其時 然善男子我実成仏已來等^ト。(『昭和定本』九四頁)</p> <p>② 此等^ハ現文^ハ釈迦如來^ハ内証^{シタマフ}皆^ニ盡^ニ此經^ニ。(『昭和定本』一三二頁)</p> <p>③ 今^ハ法華・涅槃久遠実成^ハ円仏之実説也。十界互具^ハ実言也。(『昭和定本』一三五頁)</p> <p>④ 今^ハ如^{キハ}無量義經^ノ者^{シテ}對^ニ四十余年^ノ諸經^ニ第一也。(『昭和定本』九四頁)</p> <p>⑤ 自^リ法華經^ハ外^ハ四十余年^ノ諸大乘經^ハ皆^ハ小乘^ニ法華經^ハ大乘也。(『昭和定本』九四頁)</p> <p>⑥ 自^リ法華經^ハ外^ハ四十余年^ノ諸經^ヲ皆説^{ケル}小乘^ト也。(『昭和定本』九五頁)</p> <p>⑦ 如^{キハ}法華經^ノ者^ハ序分^ノ無量義經^ニ隨^ニ挙^ゲ四十余年^ノ年限^ヲ呼^テ華嚴・方等・般若等^ハ大部諸經^ノ之題名^ヲ定^メ未顯眞実^ト。(『昭和定本』九八頁)</p> <p>⑧ 無量義經^ニ挙^ゲ四十余年^ノ大部諸經^ヲ了^テ云^フ未顯眞実^ト。(中略)不^ル來^ニ法華經^ニ已前同^シ彼外道説^ニ。(『昭和定本』一〇一頁)</p>

	<p>⑨ 四十余年之間、教主權仏始覺之仏也。仏權故所説亦權也。故四十余年之權仏説不可信之。『昭和定本』一三五頁</p> <p>⑩ 阿弥陀經説壞無量義經未顯真實之語了。『昭和定本』一三五頁</p>
<p>(c) かうたしかにくいかえして実義をさだむるには、世尊法久後要當説眞実久默斯要不務速説等とさだめられしかば、多宝仏大地よりわきいでさせ給て、この事眞実なりと証明をくわへ、十方の諸仏八方にあつまりて広長舌相を大梵天宮につけさせ給き。『昭和定本』三二〇頁</p>	<p>⑪ 於諸經勝劣者、仏自挙我所説經典無量千萬億了。説已説今説當説等一時多宝仏從地涌現定皆是眞実分身諸仏舌相付梵天。『昭和定本』九四頁</p> <p>⑫ 至正宗法華經一定一代之勝劣時吐我所説經典無量千萬億已説今説當説之金言。(中略)多宝如來從地涌出証誠妙法華經皆是眞実分身諸仏自十方尽集二処舌付梵天。『昭和定本』九八頁</p> <p>⑬ 釈迦如來内証皆尽此經。其上於多宝並十方諸仏來集庭証於釈迦如來已今當語。無如法華經經上定了。『昭和定本』一三一頁</p> <p>⑭ 今法華・涅槃久遠実成円仏之実説也。十界互具実言也。亦多宝・十方諸仏來証明之。『昭和定本』一三五頁</p>

(d) 法華經の第二云、今此三界皆是我有。其中衆生悉是吾子。而今此処多諸患難。唯我一人能爲救護。雖復教詔而不信受。等云云。此文の心は釈迦如來は我等衆生には親也、師也、主也。（『昭和定本』三二〇頁）

⑮法華經「釈迦牟尼也。不信法華經。人前釈迦牟尼取滅。此經者前雖爲滅後一仏在世也。（『昭和定本』一二三頁）」

以上が、『南条書』の「教」の説示(a)から(d)と『守護国家論』の類似している引用文①から⑮の対照表である。この表から分かることは、

(a)に対応する引用文は三箇所ある。①「如來出世本懷」、②「釈迦如來内証皆尽、此經」、③「今法華・涅槃久遠実成、円仏之実説也。」と、法華經は眞実の教えであることが示されていること。

(b)に対応する引用文は、七箇所ある。④から⑩は権実判の説示であり、両書に『無量義經』の「四十余年未顕眞実」の引用が見られること。

(c)に対応する引用文は四箇所ある。⑪から⑭の文に『法華經』見宝塔品の多宝如來の証明及び十方分身諸仏の証明の經文が引用されていること。さらに⑪から⑬の文に『法華經』法師品の經文「已説今説当説」の三説超過の經文が見えること。

(d)に対応する引用文は一箇所ある。⑮「法華經「釈迦牟尼也。」の文からは、聖人初期の頃から一貫して、法華經は釈尊の眞実の語であると信仰的に受けとめられていたことが確認できること。

以上、四点である。

(2) 「機」の説示

『南条兵衛七郎殿御書』の五義の説示	『守護国家論』の引用文
<p>(e)我等衆生は根の鈍なる事すりはんどくにもすぎ、物のいろかたちをわきまへざる事羊目のごとし。貪瞋癡さわめてあつく、十悪は日日にをかし、五逆をばおかさざれども五逆に似たる罪又日日におかす。又十悪五逆にすぎたる謗法は人毎にこれあり。させる語を以て法華経を謗する人はすくなけれども、人ごとに法華経をばもちゐず。又もちゐたるやうなれども念仏等のやうには信心ふかからず。信心ふかき者も法華経のかたきをばせめず。(『昭和定本』三二二頁)</p>	<p>①⑥ 法華経第二云 若人不信毀謗斯經則斷一切世間仏種「經文」。不信相貌令三人捨於法華経也。(『昭和定本』一〇五頁)</p> <p>①⑦ 於末法者常没闍提多之。(『昭和定本』一〇九頁)</p> <p>①⑧ 源空亦如彼善星以謗法故墮無間。(『昭和定本』一一九頁)</p> <p>①⑨ 若善比丘見壞法者置不呵責驅遣挙処当知是人仏法中怨。(『昭和定本』一一九頁)</p>

以上が、『南条書』の「機」の説示(e)と『守護国家論』の類似している引用文①⑥から①⑨の対照表である。この表から分かることは、

(e)に対応する引用文は、四箇所ある。表現に違いがあるが、①⑥「不信相貌令三人捨於法華経也。」には、法華経を捨てさせる人師の謗法を顕わしていること。

次に①⑦は「於末法者常没闍提」と、末法においては一切の善根を断じられた謗法の者であると規定していること。①⑧は聖人が「源空亦如彼善星以謗法故墮無間。」と、法然を「悪邪心」を生じたために生身のまま阿鼻地獄に墮ちたとされている善星比丘にたとえて、宗教的罪の重さをあらわしている

こと。①9は「見^テ壞^ル法者^ヲ置^テ不^ニ呵責^シ駢^シ遣^シ拳^セ処^ニ当^レ知^ル是人^ハ仏法^ノ中^ノ怨^{ナリ}。」と、仏法が破られるところを見ても呵責しない仏弟子こそが仏法を破る怨敵であると

その罪を指摘していること。
以上の点である。

(3) 「時」の説示

<p>『南条兵衛七郎殿御書』の五義の説示</p> <p>(f) 仏入滅の次日より千年をば正法と申^ス。持戒の人多^ク得道の人これあり。正法千年の後は像法千年也。破戒者は多得道^クすくなし。像法千年の後は末法万年。持戒もなし破戒もなし、無戒者のみ国に充滿せん。(『昭和定本』三三二頁)</p>	<p>『守護国家論』の引用文</p> <p>②0 既入^ニ末法^ニ。設^ヒ雖^モ有^リ二教法^ニ無^ク行証^ニ。於^テ然^ル者行^ニ仏法^ニ者万^カ一難^キ有^リ得道^ニ一歟。(『昭和定本』一〇〇頁)</p>
<p>(g) 当世は正像二千年すぎて末法に入て二百余年、見濁さかりにして、悪よりも善根にて多^ク悪道に墮^クべき時刻也。悪は愚癡の人も悪とすればしたがわぬへんもあり。火を水を用^ヒてけすがごとし。善は但^タ善と思^フほどこに、小善に付て大悪のをこる事をしらず。(『昭和定本』三三二頁)</p>	<p>②1 至^テ末論師並^ニ訳者時^ニ一向執^{スル}二権經^ニ故會^ニ實經^ニ入^レ権經^ニ權實雜^ニ乱^ニ之失出来^{セリ}。亦至^テ人師時^ニ各以^テ二依憑經^ニ為^スレ本故以^テ二余經^ニ為^ス二権經^ニ。従^リ是弥背^ニ仏意^ニ。(『昭和定本』一〇三―四頁)</p>

<p>(h)今の世は末法のはじめなり。小乗經の機・權大乘經の機みなうせはててた、実大乘經の機のみあり。(『昭和定本』三三三頁)</p>	<p>②②而源空並所化衆不知此義故以法華・真言三師並源信所破入難聖雜並往生要集序顯密之中三師並源信作法華・真言謗法人。其上化日本国一切之道俗於法華・真言令習二時機不相應之旨於在家出家諸人留法華・真言結緣。豈非仏所記惡世中比丘邪智心諂曲人乎。亦可免則斷一切世間仏種失乎。(『昭和定本』一〇四一五頁)</p>
<p>以上が、『南条書』の「時」の説示(f)から(h)と『守護国家論』の類似している引用文②②から②③の対照表である。この表から分かることは、</p> <p>(f)に対応する文は一箇所である。②②の文は、末法の者や万が一にも得道することはないという、時に規定された機根を示していること。</p> <p>(g)に対応する文は二箇所ある。②①②②は、末法の論師や人師の仏法理解が混乱し、かえって仏意に背いていることが説かれており、(g)の文と共通するところがあること。</p> <p>(h)に対応する文は一箇所である。②③は末法の者は、法</p>	<p>華・涅槃經でしか救済されない機根であると述べているところが、共通している。</p> <p>以上、三点である。</p>

(4) 「国」の説示

<p>『南条兵衛七郎殿御書』の五義の説示</p>	<p>(i) 国をしるべし。国に隨て人の心不定也。たとへば江南の橘の淮北にうつされてからたちとなる。心なき草木すらところによる。まして心あらんもの何ぞ所によらざらん。 (『昭和定本』三三三頁)</p>	<p>『守護国家論』の引用文</p>
<p>(j) 抑日本国はいかなる教を習てか生死を離べき国ぞと勘たるに、法華經云、於如来滅後、閻浮提内、広令流布、使不断絶等云云。此文の心は、法華經は南閻浮提の人のための有縁の經也。(『昭和定本』三三三頁)</p>	<p>②4 生法華經流布国、聞此經、題名生信、依宿善深厚。(『昭和定本』一二七頁)</p> <p>②5 雖三千世界、広弘自以法華・涅槃・定南方流布处。於南方諸國中、日本国殊法華經可流布处也。(『昭和定本』一二八九頁)</p>	<p>②6 肇公法華翻經後記云、羅什三藏奉値、須利耶蘇摩三藏、授法華經、時語云、仏日西山、隱遺耀照、東北。茲典有縁於東北諸国。汝慎伝弘、「已上」。東北者日本也。自西南、南天竺、東北、指日本。故慧心一乘要決云、日本一州円機純一。朝野遠近、同帰一乘、縉素貴賤、悉期成仏、「已上」。願日本国、今世道俗、捨選、択集、久習、依法華・涅槃、現文、持肇公慧心、日本記、企法華修行安心。(『昭和定本』一二九頁)</p>
<p>(k) 弥勒菩薩云、東方有「小国」、唯有「大機」等云云。此論の文如きは、閻浮提の内にも東の小国に大乘經の機ある歟。肇公記云、茲典有縁東北小国等云云。法華經は東北の国に縁ありとか、れたり。安然和尚云、我日本国皆信大乘等云云。慧心一乘要決云、日本一州円機純一等云云。釈迦如来・弥勒</p>		

菩薩・須梨耶蘇摩三藏・羅什三藏・僧肇法師・安然和尚・慧心先德等の心ならば、日本国は純に法華經の機也。一句一偈なりとも行ぜば必得道なるべし。有縁の法なるが故也。(『昭和定本』三三四頁)

以上が、『南条書』の「国」の説示(i)から(k)と『守護国家論』の類似している引用文②④から②⑥の対照表である。この表から分かることは、

(i)に対応する『守護国家論』の説示は見られなかったこと。

(j)に対応する説示は二箇所である。日本国は法華經有縁の国と規定されている点において共通点があること。

(k)に対応する説示は、一箇所である。「肇公記云」それに対する②⑥は「肇公法華翻經後記云」と、両書に『法華翻經後記』が引用されている。その文とは、鳩摩羅什三藏が須利耶蘇摩三藏から法華經を授かる時に、この經典は東北の小国に縁があると説かれたという文である。さらに両書に「慧心一乗要決云」と記されて『一乗要決』の引用文が見える。その文には、

日本国は純ら法華円教の機根であることが説かれている。

以上、三点である。

(5) 「序」の説示

『南条兵衛七郎殿御書』の五義の説示	『守護国家論』の引用文
<p>(1) 権大乘の弘まれる国をば実大乘をもつてこれをやぶるべし。天台智者大師の南三北七をやぶりが如し。(『昭和定本』三二五頁)</p>	<p>②⑦ 慧心意造^{ノハテ}往生要集^ヲ調^{ヘテ}末代愚機^ヲ為^レ入^ニ法華經^ニ也。例如下^{セハシ}仏以^テ四十余年^ノ經^ヲ調^ニ権機^ヲ入^中法華經^上也。(『昭和定本』一〇九頁)</p> <p>②⑧ 源信僧都^ハ永観二年甲申^ノ冬十一月造^リ往生要集^ヲ寛弘二年丙午^ノ冬十月之比作^ル二乗要決^ヲ。其中間二十余年。先^ニ権後^ニ実^ヲ宛^モ如^レ仏亦如^シ龍樹・天親・天台等^ノ。(『昭和定本』一一〇頁)</p>
<p>(m) 日本国は天台真言の二宗のひろまりて今に四百余歳、比丘・比丘尼・うばそく・うばひの四衆皆法華經の機と定りぬ。善人悪人・有智無智、皆五十展転の功德をそなふ。(『昭和定本』三二五頁)</p>	
<p>(n) 此五十余年に法然といふ大謗法の者いできたりて、一切衆生をすかして、珠に似^{タル}石をもつて珠を投させ石をとらせたる也。(『昭和定本』三二五頁)</p>	

以上が、『南条書』の「序」の説示(1)から(n)と『守護国家論』の類似している引用文②⑦と②⑧の対照表である。この表から分かることは、(1)に対応する説示は二箇所である。(1)は、「先に弘まっ

ている権大乘の教えを実大乘をもつてやぶるべきである。天台大師が南三北七の大師をやぶつたように。」と、先に権大乘が弘まっている国は、次にそれをやぶり実大乘を弘通すべきことが示されている。

②⑦は、慧心僧都源信が先に『往生要集』を著したのは念仏修行をして人々の機根を調え、法華經へ導くための手立てであった。それは、仏が四十余年の經を説いて機根を調えて、法華經の教えに入らせようと導いたことと同じである、という説示である。②⑧も同様の説示である。したがって『南条書』の(1)は中国の仏法流布の前後、『守護国家論』の②⑦②⑧は日本の仏法流布の前後を示していること。

(m)、(n)に対応する説示はみえなかったこと。

以上、二点である。

ここで指摘できることは、第一に『南条書』の五義の説示すべてに対して『守護国家論』の説示が見られたこと。第二に、「教」の説示(b)と対応する④から⑩の引用文すべてに『無量義經』の「四十余年未顕真実」の引用が見えること。第三に「教」の説示(c)と対応する⑪から⑭の引用文すべてに『法華經』見宝塔品の多

宝如来の証明及び十方分身諸仏の証明の經文が引用されていること。第四に「国」の説示(k)には、「肇公記云」とあり、それに対する②⑥は「肇公法華翻經後記云」と、両書に『法華翻經後記』が引用されていること、さらに両書に「慧心一乗要決云」と記されて『一乗要決』の引用文が見えること。以上四点である。

四 『南条兵衛七郎殿御書』の五義の説示を視点とした『顕謗法鈔』の検討

弘長二（一二六二）年伊豆流罪中に流刑地伊東で著された『顕謗法鈔』には、はじめて五義が示されている。この書には、『南条書』と同様の五義の説示がみえるだろうか。『南条書』の五義の説示を視点として『顕謗法鈔』における五義の説示を検討する。

なお、表の形式は、先に示した表と同様である。

(1) 「教」の説示

<p>『南条兵衛七郎殿御書』の文（昭和定本頁）</p> <p>(a) 一切衆生の本師にてまします釈尊の教こそ本にはなり候べけれ。（『昭和定本』三一九頁）</p>	<p>『顕謗法鈔』の文（昭和定本の頁）</p> <p>②9 法華經一經に限て、已説の四十余年・今説の無量義經・当説の未來にとくべき涅槃經を嫌て法華經計をほめたり。釈迦如来・過去現在未來の三世の諸仏、世にいで給て各々一切經を説給に、いづれの仏も法華經第一なり。（『昭和定本』二六九頁）</p>
<p>(b) 而ども仏いかながおぼしけん、無量義經に以て方便力四十余年未レ顯ニ真実ニととかれて、先四十余年の往生極樂等の一切經は親の先判のごとくくひかえされて、過ニ無量無辺不可思議阿僧祇劫ニ終不レ得成ニ無上菩提ニといひきらせ給て、法華經の方便品に重て正直捨テ方便ヲ但説ニ無上道ニととかせ給り。方便をすてよととかれてはんべるは、四十余年の念仏等をすてよととかれて候。（『昭和定本』三一九―二〇頁）</p>	<p>③0 法華經は真諦俗諦・空假中・印真言・無為理・十二大願・四十八願、一切諸經の所説の所詮の法門の大王なり。これ教をしれる者なり。（『昭和定本』二七〇頁）</p> <p>③1 但無量義經計こそ前四十余年の諸經を嫌、（『昭和定本』二六九頁）</p>

<p>(c) かうたしかにくいかえして実義をさだむるには、世尊法久後要当レ説ニ真実ニ久黙ニ斯要ニ不ニ務速説ニ等とさだめられしかば、多宝仏大地よりわきいでさせ給て、この事真実なりと証明をくわへ、十方の諸仏八方にあつまりて広長舌相を大梵天宮につけさせ給き。 (『昭和定本』三二〇頁)</p>	
<p>(d) 法華經の第二云、今此三界皆是我有。其中衆生悉是吾子。而今此処多諸患難。唯我一人能為ニ救護ニ。雖ニ復教詔ニ而不ニ信受ニ等云云。此文の心は釈迦如来は我等衆生には親也、師也、主也。(『昭和定本』三二〇頁)</p>	<p>の大王なり。」と述べ、釈尊一代の聖教のうち最上なることを明らかにされている。先に検討した『守護国家論』の①から③は、釈尊の真実の「教」であることを強調されていた。このような表現の違いから、『顕謗法鈔』は、『守護国家論』よりも法華經を第一とする立場をより闡明に示されていることが窺われる。</p> <p>(c)・(d)に対応する引用文は見えない。 以上、二点である。</p>

以上が、『南条書』の「經」の説示(a)から(d)と『顕謗法鈔』の類似している引用文②⑨から③⑪の対照表である。この表から分かることは、

(a)に対応する引用文は二箇所ある。②⑨は「釈迦如来・過去現在未來の三世の諸仏、世にいで給て各々一切經を説給に、いづれの仏も法華經第一なり。」と、法華經が第一の教えであるということを信仰的に説き示されている。③⑩も「一切諸經の所説の所詮の法門

(2) 「機」「時」「国」「序」の説示

『南条書』の五義の説示に対応する五義の説示は見えない。

五小結

以上、五義成立の時期について『南条書』に詳説されている五義の説示を視点として聖人初期の著作『守護国家論』と聖人遺文中において初めて五義が示された『顕謗法鈔』の五義の説示を検討した。これまでの検討で分かったことは、第一『守護国家論』に、『南条書』に類似した教・機・時・国・序の五義の綱目の説示が認められ、この頃、五義は整足はしていないが、聖人の認識としてあったことが確認できた。茂田井教亨氏、浅井圓道氏、上田本昌氏の指摘の通りである。第二『守護国家論』・『顕謗法鈔』・『南条書』に共通して見えた綱目はわずか「教」しか認められなかったことである。

以上のように、『南条書』を視点として『守護国家論』と『顕謗法鈔』の五義の説示を検討してきた。今後の課題として「教」の説示に着目をし、聖人の生涯を通じての「教」の認識について考察する。

註

- (1) 『報恩抄』（昭和定本）一一九四頁
- (2) 『南条兵衛七郎殿御書』（昭和定本）三一九頁
- (3) 『南条兵衛七郎殿御書』（昭和定本）三二二頁
- (4) 『南条兵衛七郎殿御書』（昭和定本）三三二頁
- (5) 『南条兵衛七郎殿御書』（昭和定本）三三二—三三頁
- (6) 『南条兵衛七郎殿御書』（昭和定本）三三三—三四頁
- (7) 『南条兵衛七郎殿御書』（昭和定本）三三四—三五頁
- (8) 日蓮宗勸学院監修『日蓮宗宗義大綱読本』（二〇〇二年、日蓮宗新聞社）日蓮宗宗義大綱 一 宗義の体系収録
- (9) 日蓮宗勸学院監修『日蓮宗宗義大綱読本』（二〇〇二年、日蓮宗新聞社）日蓮宗宗義大綱 二 五綱の意義収録
- (10) 茂田井教亨著『観心本尊抄研究序説』（一九六四年、山喜房佛書林）七二頁（取意）
- (11) 茂田井教亨著『観心本尊抄研究序説』（一九六四年、山喜房佛書林）二四〇頁
- (12) 浅井圓道稿「五義判の形成過程の考察——五義の発表まで——」（一九六四年、『大崎学報』第一一八号）二二—三頁（取意）
- (13) 浅井圓道稿「五義判の形成過程の考察——五義の発表まで——」（一九六四年、『大崎学報』第一一八号）二四—九頁（取意）

- (14) 浅井圓道稿「五義判の形成過程の考察——五義の発表まで——」(一九六四年、『大崎学報』第一一八号) 二九—三三頁(取意)
- (15) 浅井圓道稿「五義判の形成過程の考察——五義の発表まで——」(一九六四年、『大崎学報』第一一八号) 三三—三九頁(取意)
- (16) 浅井圓道稿「日蓮聖人の五義判の成立について——選択集との関連において——」(一九六五年、『印度学仏教学研究』第三号第一号) 一六八頁(取意)
- (17) 上田本昌稿「日蓮聖人における五義判の成立と展開」(一九八四年、『印度学仏教学研究』第三十三卷第一号) 三十頁(取意)
- (18) 茂田井教亨講述『本尊抄講讀』下卷(一九八七年、山喜房佛書林) 一一八五頁取意
- (19) 『上野殿御返事』(『昭和定本』八一—九頁)
- (20) 高木豊氏の研究では、「おそらく鎌倉番役で上番した折、日蓮に帰依したと考えられる。しかし、文永元年の『南条書』によれば、その関係は必ずしもそれ以前のはやくからのものであったとは考えられず、むしろ文永元(一二六四)年に近かった時期と思われる。しかも七郎はこの後幾何もなくして不帰の客となった。」(高木豊著『日蓮とその門弟』一九六五年、弘文堂) 一九四頁(取意)とされている。北川前肇氏のご教示によると、「伊豆流罪後に、罪人である日蓮聖人に会って
- 法門を聴聞したとは考えにくい。したがって、聖人初期の鎌倉において法門を聴聞したのではないだろうか。」と推測されている。
- (21) 『富木殿御返事』(『昭和定本』一五頁)
- (22) この『富木殿御返事』の系年に関して、諸説あるが、北川前肇氏は、昭和定本の建長五(一二五三)年十二月九日の系年を踏襲されている。一方、高木豊氏は『五輪九字明秘密釈』を日蓮聖人は建長三年に京都で書写し、その後肥前公は清澄寺で建長六年に書写したのは、日蓮聖人の所持本であったと推察されている。すると、日蓮聖人は建長六(一二五四)年九月三日までは清澄寺を退出していなかったということが導きだされる。したがって、『富木殿御返事』の昭和定本の建長五年の説とは矛盾する。つまり、この書状は、建長六年以降の一二月九日とみることも可能であると指摘している
- 『日蓮攷』(二〇〇八年、山喜房佛書林) 一〇—一三頁。つまり建長五(一二五三)年にはまだ清澄寺を退出していなかったと推測しているのである。また、中尾堯氏は、富木常忍はその頃下総の守護所にいたことは確実であると断言されている。(中尾堯稿『富木殿御返事』と日蓮聖人伝の検討』(一九七三年、平楽寺書店) 三〇四頁) 両者ともに、建長五(一二五三)年十二月九日は日蓮聖人が鎌倉に進出されていなかったと推測している。さらに寺尾英智氏は、「日蓮聖人の鎌倉

進出の日時は従来室町時代の伝記である日澄『日蓮聖人註画讃』の記述をもとに、建長五（一二五三）年の内に鎌倉に進出したとされ、この説は広く認知されてきた。最新の研究では建長六（一二五四）年九月には、いまだ清澄寺に留まっていたであろうことが示され、それ以後の退出であるとされている。次に問題となるのが鎌倉進出の時期である。『災難対治鈔』には、「今見聞此国土一起種種災難」。所謂自建長八年八月一至正元二年二月大地震・非時大風・大飢饉・大疫病等種種災難連連于今不絶。大体国土人数似可尽」（昭和定本一六五頁）の一節がある。建長八（一二五六）年八月から正元二（一二六〇）年二月までと期間を示していることに注目すると、建長八（一二五六）年八月は、どのような時点を示すのだろうか。従来は種類の災難が起きはじめた時点と理解されている。そこで『吾妻鏡』の記述を確認すると、たしかに建長八（一二五六）年八月六日鎌倉で大風雨が降り、山崩れで死者が多数出たことが記録されている。ところが、日蓮聖人は災難に言及するばかり、この災害について示すことはなく、専ら正嘉元（一二五七）年八月二十三日の鎌倉大地震を起点に、その後の災難を揚げているのである。」と、従来の説に疑問を投げかけている。日蓮聖人遺文や『吾妻鏡』の記述を検討し、「建長八（一二五六）年八月とは災難興起の起点を示したものでは

なく、日蓮聖人が鎌倉に進出した日付を示している。」としている。（寺尾英智稿「鎌倉の日蓮をめぐる三つの日付」〔特別展 鎌倉の日蓮聖人——中世人の信仰世界——〕（二〇〇一年、日蓮宗神奈川県第二部事務所）一四六―七頁（取意））諸説あるが、本稿においては昭和定本の系年を踏襲する。